〔史料紹介〕

ノジャンのギベールの回想録（一）

——中世都市ランのコミューン運動——

守山記生

一、この史料紹介は、John F. Benton (ed.), Self and Society in Medieval France: The Memoirs of Abbot Guibert of Nogent, New York, 1970 の抄訳である。なお翻訳にあたっては、ラテン語版 Guibert de Nogent, De vita sua, éd. G. Bourgin, Paris, 1907 とフランス語版 Guibert de Nogent, Autobiographie, introduction, édition et traduction par E. R. Labande, Paris, 1981 も参照した。

一、史料紹介の題目は、翻訳する第三巻の内容を考えて、「ノジャンのギベールの回想録——中世都市ランのコミューン運動——」とした。もっとも、ラン市のコミューン運動が起った直接の原因は、一一〇六年ゴードリが司教に選出されたことに始まる。それ以前はその前史として読まれたい。又、この史料紹介は二回にわけて掲載する予定である。

一、著者ギベールの生没年代は一定していない。J. F. Benton によれば、一〇六四年？から一一二五年頃までであり、A. Vermeesch によれば、一〇五三年に生まれ……二四年から一一三〇年の間に没した。しかしながら、一一〇四年以来、ラン司教管区に属したノジャンの大修道院長であったことが重要である。

一、G. Duby によれば、ギベールがこの『回想録』を執筆したのは一一一五年であり、ラン市のコミューン運動に彼自身がなかば当事者であったこと、又客観度もかなりあって、同時代史料としての価値は非常に高く、中世都市史料として一級の作品である。

一、本文、注とも内容を考えてごくわずかであるが省略した箇所がある。しかしながら、次号掲載予定分では省略はもっと大幅になるはずである。

一、原著の訳注は章ごとに番号を付けて頁ごとに付せられているが一括して最後に記した。従って注の番号は原著のそれとは一致していない。

一、最後に、翻訳の許可を快諾してくださったJ. F. Benton教授に感謝の意を記しておく。

* * *

第一章

私はラン Laon の人々の物語を話すこと、あるいはむしろ彼らの悲劇を舞台でお目にかけることを約束しておいた。[1] 私見によれば、すべての災難の起源はランの司教たちの誤ちから生じたのだということを先ず説明しなければならない。その存在はずうっと前に遡るけれども、アダルベロン Adalbéron としても知られるアスラン Ascelin についての記録は、この作品に織り込まれるべきである。[2] 彼はロレーヌ Lorraine 生まれで豊かな土地と財産を持っていたが、それらすべてを売り払って巨額の金を自分の統轄する司教管区にもたらしたことがわかる。彼はその教会を見事な備えつけで飾り、聖職者と司教職 bishopric の富を大いに増加させたが、しかし、これらすべての施しを彼はこの上ない異常なよこしまさによってけがした。それは、忠誠を誓っていた自分の主君であるあどけない少年王を彼が裏切り、シャルルマーニュ Charlemagne の家系の継受を他の家系に彼がそらせたとは何とよこしまで恥知らずなことであることか。彼はユダ Judas にならって、この犯罪を洗足木曜日 Maundy Thursday に犯した。[3] 統治している君主とその子孫を倒すに際して、彼はその変化は後代に役立つだろうとたしかに予見したのではなく、無邪気な人を犠牲にして彼自身のよこしまな意志を達成することを目指した。それでも、このことにもかかわらず、神が罰したまう日を延期されたので、世俗的な富がこの都市とその司教に及んだ。

第二章

後の司教エリナン Hélinand は全く貧しい家の出で素姓の賤しい人であり、乏しい教育しかなく人物として少ししか価値のない人であった。[4] エリナンはポントワーズ Pontoise 伯領の出身で、老ポントワーズ伯ゴーティエ Gautier と知り合いであったために、その妻がこの伯とある種の

血縁関係をたしかに持っていたイギリス国王エドワード Edward の好意を得て、国王の宮廷礼拝堂付司祭 chaplain になった。[5] 彼はフランス風の優雅な礼儀作法を身につけていたので、イギリス国王は彼をフランス国王アンリ Henri の許へしばしばつかわした。アンリはとてもどん欲で司教職を売ることに熱中していたので、エリナンは贈物という形でのたくさんの賄賂によって、国王から、フランスの司教の誰かが死んだときには彼が司教の職を受けつぐべきであるという約束を手に入れた。イギリスの国王と王妃の宮廷礼拝堂付司祭としての彼の地位によって、彼は巨大な山をなす金をためこんでいた。何故なら、当時イギリスは無尽の富に満ちていたからである。この贈賄のために寵愛に浴して、彼の意見は国王アンリに傾聴された。このようにして彼の司教就任の時はやってきた。彼はランの司教に任じられたが、自分の家柄や学問の知識に対する敬意によっては全く影響力を持たないだろうということを知っていた。そのために、彼は大量に富をたくわえ、大いに打算的に分配するすべを知って、富と気前のよさに希望をたくした。

このようにして、彼は諸教会の確立と建設に着手したが、神の栄光に尽力すると思われた一方で、これらの善なる仕事によって人気と彼自身の名声が拡まることだけを求めているという争うべからざる証拠を与えた。このようなずるさによって、彼はランス大司教職 archbishopric of Reims を所有し、彼はそれをその多額の収入が神に属するものに最も欲得づくの男である国王フィリップ Philippe によって二年間浪費されてしまった後に手に入れた。その時、彼は主なる教皇から一人の妻を娶っている者は誰でもどんな環境においてももう一人の妻を娶ることは出来ないという言葉を受けとった。[6] なぜ彼がこのようなことに精を出すのかを直接にたずねたある者に対して、彼は自分も又教皇になったとしてもこのことをきっと隠さないであろうといった。

自己本位と他のどんな人間的情熱の点では彼が個人的にいかなるものであったとしても、教会の自由を見事に守り、その寛大な補助金によって司教管区とそれに付属する諸教会を彼が前進させた名誉のすべてはたしかに彼に負うものである。[7] ところで、富が外部から彼の許に流れ込んできたのだから、彼が自分の所有地にある家々の美化にそれを使うのは当然のことであった。

第三章

エリナンの死後、アンゲラン Enguerrand がやってきた。[8] 彼は前述の司教に高貴と学問の両方において凌駕したが、彼に認められた教会の諸権利を守ることではずうっと劣っていた。懇願と贈物によって、エリナンは国王フィリップから、以前には王権によってこの司教管区から集められていた特定の収入を引き取っていた。この引き取りは国王の特許状と司教の印章によって確認されていた。彼自身の破滅の因となるほどに、アンゲランはその即位時にすべてを国王にもどして、続く三人の司教の支配の間にこの収入は教会の手元から完全に離れてしまい、多分永久にそうなるであろうと思われる。[9] 私見によれば、このようにして、彼は続く司教たちのすべてをこの聖職売買 simony に巻き込んだ。即ち、彼らはアンゲランが司教にしてもらうために言語道断にも与えたものの支払要求を国王がへらすように気を配って職務についた。神ご自身のすべての恩寵を失って、彼は一般の兵士や芸人よりも劣ったおろかな無駄話やみだらな話に耽って、倹約や宗教的掟を愚弄した。彼の時代に、当市とその諸教会及び当司教管区全体の崩壊を招く理由が、およそ不幸な諸結果を伴って、現われはじめた。

彼と同じ呼び名のボブスのアンゲラン Enguerrand of Boves という男は、彼と近縁であったが、とても寛大で気前がよく親切で、諸教会、少なくとも宗教が遵奉されていると自分が判断したところには大いに敬意と鷹揚さを示した。しかし、他方では、彼の女好きは破廉恥であったので、まともな類いの女も雇われ女もいるいろんな類いの女性を囲って、彼女らのみだらな行為の指図に従う以外はほとんど何もしなかった。[10] 彼は結婚運がとても悪かったので、他の男たちの妻の間をさまよいはじめ、親戚であるナミュール Namur 伯ゴドフロワの妻を娶るためにひそかに旅立った。それから、こっそりと誘惑していたその女性をば彼は公然たる結婚で一緒になった。この結婚はいく度も破門 anathema によって非難され、諸教会会議の抗議によって呪われるべきと宣言されたが、[11] もしアンゲランの親戚関係とこの女性のへつらいのうまさが司教を和らげなかったならば、彼らは二人とも恥辱という圧力でとうに縁を切っていたかもしれない。この軟弱な態度は彼らの不義な抱擁をはげまし、その結果、すべての者に禁じられていて公には破門とされた行為がこっそりと赦免された。何と恥知らずな事か。彼が不正にも赦免の保障を与えた者たちはあえて

彼ら自身が赦免されたのだとは全く考えなかったのはたしかである。

その間に、「へびの根からまむしが出る」[12]即ち、悪が育てられるとそれは一層悪い何かによって突発するものであるから、妻を盗み取られたゴドフロワがポルシァン伯領county of Porcien に対して仕放題を尽くした殺りくについて誰がどのように話したらよいであろうか。問題の女性はポルシァン伯ロジェRogerの娘であり、彼の末っ子であった。ずうっと高貴の生まれである妻に生ませた息子、娘たちを脇にやり、彼らの継母の要求に応じて最初に生まれた相続人を閉め出して、この伯は生まれの高貴さで劣る母親が生んだこの娘を、結婚持参金として彼の伯領を譲渡して、ロレーヌ人ナミュール伯ゴドフロワと結婚させた。[13]彼女の夫がロレーヌで彼の敵たちのある者と交戦している間、その妻は、夫の命令でポルシァンにあるトールヌ Tournes の城に滞在した。[14]もし、彼女が望んだようにしばしば彼がその結婚責務を彼女に支払ったならば、彼女は身を慎んだであろうか。次のことだけはたしかに言えるであろう。つまり、特に、他の男との交りで既に妊娠して自分の夫の許へやってきたように、邪悪な秘密行為によってだんだんに転落しなかったならば、彼女はこのような明白で恐るべき恥辱に決して落ち込まなかったであろう。彼女の過去の淫らについての悪名は我々がそのことを語ったり、思い出すことさえ恥ずべきほどに彼女を知るすべての人々に知られていた。

ゴドフロワは容貌のすべての点で男前である青年であったが、彼女が一緒になったアンゲランは年長であった。このロレーヌ人に捕えられたアンゲランの追随者はすべて絞首台にかけられたり、ポルシァン伯領を訪れる者には誰にでも今日でもはっきりとわかるように、眼をえぐり取られたり、足を切断されたりしたほどに狂気じみた戦いが両者の間で荒れくるい出した。この戦争で捕えられたおよそ一二人の男たちが一日のうちに絞首台につるされたということをこのような処刑に居合わせたある者から私はたしかに聞いた。ポルシァンの主要な人物の何人かがこの荒廃の仲介人であり張本人であって、そのために彼らは生きている間も死んでからも汚名を残すことになった。このようにして、火と鍛冶の神バルカン Vulcan の火ではらまなかった性愛の女神ヴィーナス Venus は軍の神マルス Mars の許に移り変わる。つまり、肉慾の炎熱が残酷のうちへと煮え

こぼれる。両陣営で勃発した掠奪や焼きつくし又このような騒乱がふつうもたらす他の事どもについて誰が話すことが出来るだろうか。それは恐るべきものであるのでそのことを話そうとする人々を唖然とさせる。

その上、狂気の沙汰でわが司教はこの極悪非道な同盟に赦免を与えた。

この司教のふるまいについて語られる多くのこと、最も著しくは彼がその罪の無自覚によって神にざんげをばやったということは言わないままにしておいた方がよいであろう。ついに、彼は病気におそわれたが、その病気によって正に彼の愚行に差し押えられた。彼は昏睡状態に落ち入り、死の影に突然つつまれたのでうわ言しか話せなくなった。ざんげ、塗油、秘蹟が彼の要求によってではなく、他の者達の配慮によって彼に施された。彼が死に襲われて口も目もほとんど駄目になってしまったときに、彼がその邪悪な赦免によって結びつけていたもう一人の当事者であるアンゲランが、聖職者たちが塗油式をとり行えるようにあたかも破門されているかのように彼をその館から閉め出していたにも拘らず、姿を見せた。涙ながらにこの司教に挨拶して、彼は言った。「司教殿、ほら、私アンゲランですよ、あなたの親戚の。」彼はざんげや塗油や秘蹟を受けることを求められない程に意識がなかったにも拘らず、彼はこの男の首のまわりにその腕を投げかけて、彼を引き寄せ口づけをした。すべての人々はこれを見て憤慨したが、後は彼の最後の息が切れるまでうわごとを夢中になって喋ること以外には何も彼の唇からは出てこなかった。彼女の愛を得んがために司教がそれをやってしまった当の女性はしばしば司教臨終時の上述の出来事を公然と話すことによって司教がその生涯でなしたその悪が邪悪の石のように彼にのしかかったということを示した。ご存じの通り、このようにして、ある者たちの「不正を天はあらわし、地は起って彼らを攻めるであろう」[15]、そして彼らは不正な手段によって悦ばせたいと思うところの当人たちを不機嫌にする。

第四章

彼がこのようにして死去し、その司教職は二年間も空席のままであったが、ついに我々は後継者を選ぶために一同会することになった。[16] 出席者のうちには例のアンゲランがいた。国王が彼の浅薄な言動の故に司教の職務には彼をつかせないことを宣誓していたのに、彼は国王に訴えて前任司教という確認を手中にしていた。司教に選任された者は

彼に恩を受けているのだということをわからせるあらゆる努力を彼がやっているのは明らかであった。国王と聖職者たちはとても強力に一人の候補者に好意を寄せた。この候補者はこの好意の結果として国王の結婚にあえて反対することはありえそうにもなかった。[17] このようにして、当市の破滅と当司教管区全体の損失に導いて、彼らはイギリス国王の官房長で評判によれば金銀で豊かなゴードリ Gaudry という人物を選んだ。[18]

この選挙の前に、ランの教会の二人の副司教archdeacon、ゴーティエ Gautier とエバル Ebal が支持者の相争う党派によってその席につけられていた。彼らはローマ教皇庁 the Apostolic See の決定によってその職をしりぞけられた。何故ならゴーティエは常に聖職者というよりむしろ軍人であり、他の者、即ちエバルは女性に対して並みはずれて淫乱であったからである。この両者が排斥されると……《以下原文の一五行省略——訳者》……。しかし、私が脱線した問題の箇所にもどることにしよう。

利得のむなしい希望をいだいて聖職者たちが、まずアンゲランの尽力とそれ自体の害悪に応じた他の者たちの支援によって、ゴードリを選んだ後に、彼は教会法 canon law に反してイギリス国王からルーアン Rouen の彼の宮廷にやってくることを求められた。[19] 彼はどの教会勤めもしたことはなく剃髪以外の他のどんな聖なる身分として認められてはいなかったけれども、この選出に決して疑いをいだいてはいなかった。しかしながら、彼はその影響力を行使してその場で副助祭 subdeacon に任じられ、ルーアン教会の司教座聖堂参事会員として認めてもらおうとした。何故なら、彼はこの時まで軍人の生活以外には何もしてこなかったからである。すべての者が彼の就任に賛成したときに、彼の選出に対する唯一の不同意が、学芸と沈着な性格において全フランス、あるいはむしろ全ラテン世界の光明であるアンセルム師 Master Anselm によってなされた。[20] 彼は充分に固められた証明によってゴードリという人物を知りつくしており、一方我々は不本意ながら見知らぬ男を支持していた。なるほど我々のうちでも彼に賛成しない何人かの者がいたけれども、我々より上位を占める他の者たちに悪しき気づかいをして、我々はこの権勢家の指揮に従った。

空さわぎの華麗な一大行列に迎えられて当市にやってきてから、まもなくこの選出司教は我々が彼と共にローマへ

行くことを要求した。我々の費用を出して、彼はソワソン Soissons 生まれで、充分に教養のあるサン・ヴァンサン Saint-Vincent 大修道院長アダルベロン Adalbéron、これ又教養のあるリブモン Ribemont の大修道院長、それに学問、年齢の双方で未熟であった私が同行するようにさせた。[21] 出発してラングル Langres に着くと、我々はわが教皇パスカル Paschal は直前にローマをたってこの司教管区のはずれに近づいていると知らされた。[22] 我々はこの都市に八日間滞在した。

教皇殿がディジョンにやってきていたとき、ランの聖職者でこの選出司教が同行させていた大勢の者は教皇に会いに行って、彼の滞在する城で教皇を面前にして彼らの候補者の訴えを弁護した。話された多くの事柄で、教皇はその申立ての事実についてまもなく熟知して、その請願者たちの望みに同意を与えることを約束した。彼らの請願はアンセルムが教皇に注意を促していた諸規定のいくらかに対して例外がなされたとしても彼の選挙は合法的であるということであった。しかしながら、教皇庁の構成員、特に教皇の側近は、この人物がいかに金持ちであるかを知って、選出司教に同意を示して彼を持ち上げた。何故なら金の話を聞いて愉快になるのはこの世の常であるからである。

教皇がラングル市に迎えられたその翌日に、彼は我々の訴えをとり扱った。私が彼の面前でこの選出司教の経歴や人となりについて十二分に語られている選挙に関する報告書を読み終わると、教皇は居合わせた大修道院長たちと選出司教に同行してきた司教座教会の特定の聖職者たちを召集して、提出されたこの選挙報告書を主題として我々に語りはじめた。この集会は枢機卿のほかにイタリア人司教、我々自身や他の非常に学識ある人々といった大層著名な人物が顔をそろえていた。それから教皇はまずなぜ我々が未知の人物を選んだのかをたずねた。[23] 聖職者の誰もこれに答えなかった（何故なら彼らはラテン語の基礎をほとんど知らなかったから）ので、彼は大修道院長たちに問い合わせてきた。

そのとき、私は他の二人の大修道院長の間に座っていた。彼らは二人ともたずねられたのにだまっていて、どちら側からも私が話すことをせきたてはじめたが、私はその若輩[24]の故に当惑もし、このような結果の事態だけに向う見ずの絡印を押されるのを気づかいもして、とてもおそれたので自分の口をきくことをためらった。この問題は母国語では

なく学識者の言葉で論争された。顔を赤らめ当惑しながら、私は彼の問いに答えるに適当と思われる事柄を話した。注意深い言葉使いで、私は適度な思いやりを持って、又真実からほど遠くそれないようにして、我々はこの人物については個人的に親しく知らなかったが、善意で彼のことについて述べた他の者たちの証言を真実として取り上げたという私の意見を表明した。そして彼が福音書Gospelの「目撃者がそれを証している」[25]という言明を引用してこの表明を弱めようとし、ごくわかりやすい言葉ではなかったが、彼は国王の宮廷から選ばれたという異議を提したとき、私はすぐに役に立たない言いわけを脇にやって、自分が彼の言葉を論駁することが出来ないことを認めた。[26]そのことで彼は大いに満足した。彼はその職務にふさわしいほどには学識がなかった。それから、彼の最初の質問に答えた私の間接的な弁論が少ししか重きをなさなかったのを知ったので、このことによって私は彼を大いに悦ばせたのであるが、私は当教会の緊急の必要性に及んで、この人物の個性が司教職に不適当であるという反論に対しては、簡単に応答した。

終わりにあたって、教皇は彼がどんな地位を有しているかをたずねたので、彼は副助祭であると私は答えた。[27]そこで教皇は彼がなんという教会に勤めてきたのかを問うた。この点については、私はうそをつくことを恐れて、躊躇したが、仲間の大修道院長たちは彼の勤め先はルーアンの教会であると私に示唆した。しかしながら、このことについて、私はそれが最近のことであるとの真実をつけ加えた。最後に、教皇は彼が法に合った生まれであるかどうかたずねた。というのも、教皇は彼が私生児であるとはっきり聞かされていたからである。[28]この点に関しては、他の諸点よりも私は確信しており、又特に曖昧な言い方をすることなく話したので、教皇は、「貴方はその証拠を持っているか」とたずねた。私は彼に答えていった。「他の諸点については私は沈黙を守るけれども、このことについては彼は私生児でも不法な生まれでもないことを断言することができる。」この異論を我が教皇は我々が指摘したとおりに取り下げた。しかし、教皇がこれらの点を次々ととりあげた理由は彼の任命を阻止するためではなく、これらすべての点でゴードリを非難していたアンセルム師が出席しており、それで彼が私的に述べていたことをゴードリの面前に持ち出す機会を教皇が持とうとしたからである。

しかし、この師は、この法廷の懇願を十分に見極めて（私は主なる教皇については言うつもりはない）、彼の手からヘラクレスの棍棒をもぎとることを困難な事と思った。[29] 貴族たちが互いに言い争うのを見て、この師は主なる教皇と争うほうに心を傾け、冗談にあえてそう言うならば、私とそうしたいと思った。こういうわけで、この論争は全く失敗に帰して、この選出司教は前に呼び出されて、教皇は彼の聖別に許可を与えた。この集会が解散し、教皇が出て行った後、一団の枢機卿たちがその時大変な温情を示して私に近づいてきて言った。「貴方の話は我々をたいそう喜ばせてくれました。」我が主なる神のみぞ知りたまう、その喜びとは私の雄弁からというよりもむしろこの選出司教が詰め込んで持ってきていた金にあずかれるという正によろしき期待から生じたものである。私と私の仲間のサン・ヴァンサン大修道院長アダルベロンは両者ともそれぞれそのような金のうち二〇ポンドを所持していたし、彼らの期待の広い間隙はおそらくそれで満たされたであろう。このような理由で、彼らは彼と彼の支援者を好んで支持したのである。

ついに、彼らが行ってしまったとき、教皇侍従であるクリュニー修道士ピエールが――彼は我々がイギリス国王からゴードリを求めていたときルーアンでこの選出司教と知り合いになっていたのであるが――ひそかに私に近よって次のような言葉をかけてきた。つまり、「教皇殿は貴方の望む人物の貴方の推薦を採用し、丁重に貴方の意見を聞いたのだから、今度は貴方が貴方の選出司教に示唆すべきである。それはつまり、彼が万事主なる教皇の命令に従い、又必要とあれば、貴方の選出司教のためであれ、他の人々のためであれ、貴方の要求を教皇がまた好意をもって聞くことができるように、司教が任務中の教皇に敬意を表して多額を譲るようにとね。」有毒な杯の口にぬりつけられた蜜をみよ！　何故なら、教皇の説諭に従うことほどより良いことはあるはずがなく、神によって認められた賛意に対して人々に敬意を表して譲ることほどより悪いことはあるはずがないからである。私はこのような仕事の仲介人とされることに大いに恐れをいだいた。

彼がアヴィニョン Avignon のサン・リュフ教会で司教聖別の秘蹟を受けたとき、[30] 福音書にある暗澹たる前兆が見い出された。つまり、「あなた自身の胸をも剣が刺し通すであろう。[31]」しかしながら、ラングルで教皇による彼の許可の後に、彼が聖職者たちの「汝、神をたたえよ」Te Deum

laudamus の歌唱に伴われて殉教者マメルトゥス Mamertus の祭壇に行ったとき、予言を求めて福音書を開き、彼の眼にとまった最初の節を取り出して、彼が「母上、ここにあなたの子が[32]」と読んだのは事実である。このことについて、まもなく彼はいたるところでそれを見せまわして、大いに見えをはった。

言動において、彼ははなはだしく移り気で、つまらない男であった。彼はイギリス人の間で身につけていたように、戦争、鷹狩りの話をすることに喜びを示した。彼が一つの教会を奉納したので、私が性質の良い若い教会書記 clerk と共に随行して馬に乗っていたある折りに、彼は槍をもった一人の農民に出くわした。この槍をひったくるや、自分が神聖に所持すべきであった司教冠をそのまま身につけたままで、自分の馬に拍車を入れて、この司教はまるで敵手を打ちたおすかのように、その槍を斜めにかまえた。我々のうち書記の方はありふれた言葉で、私は詩の様式で彼に言った。「それらは一緒ではうまくいかないし、同じ場所に居合わすこともない。司教の冠と槍は。[33]」

とかくするうちに、よこしまにかき集められていたイギリス貨幣、杯、器の大きな富はたちまち浪費された。私は彼が司教就任後イギリスに戻ったとき彼に同行したアンセルム師から次のことをたしかに聞いた。即ち、彼が到着するや彼が引き返したいたるところで、ある者たちは金の返済を要求し、他の者たちは器の返還を要求して大きな不満の声がわき上がったので、彼の見せびらかす富は、正直な手段によって獲得されたのではなく、他人から盗みとったのだということを師ははっきり知ったということである。

第五章

彼の司教受任のおよそ三年後に、この司教はいわば彼の時代にふさわしい次のような痕跡を残した。大へんな勢力家であるジェラール Gérard という名の女子修道院の城主 castellan は当市の貴族の一人であった。[34] 外見では彼は背が低く体もやせていたけれども、非常に快活な精神と弁舌をもち、戦争の遂行にとても精力的であったので、ソワソン、ラン、ノアイヨン諸地方で恐れられていたが、きわめて多くの人々に重んじられてもいた。彼は立派な性格の持主としてあまねく知れわたっていたけれども、時には好人物に対してでは決してなかったが、彼の周辺の人々に対してきたない言葉で辛辣な冗談をとばした。そういうわけで、彼は以前にいくらか引き合いに出したあの伯夫人[35]に対してず

けずけと個人的に悪口をいったり、ためらうことなくあからさまな嫌悪を示したりした。こうすることによって、彼はとても見当ちがいの振舞をしでかした。というのは、その大きな富でジェラールの財産を大きくしてくれたこの女性の配偶者であるアンゲランを彼は攻撃することになったからである。妻を娶る以前に、ジェラール自らが話題にしているこの女性と親密になりすぎていた。彼はしばらくの間彼女の恋人であったが、結婚するとそのみだらさを抑制した。すると、女性たちも又、いやらしい言葉で互いに攻撃しはじめた。彼女らは互いに以前の身持の悪さを知っていたので、相手の秘密を知れば知るほど、彼女らの悪口は卑劣になっていった。伯夫人は自分が彼によって棄てられたがために相手の女の夫に対しても、又その妻に対してもその女性がひねくれた言葉でしばしば彼女をののしっているのを知っていたので激怒していた。どんな蛇よりも毒々しくなって、この男を破滅させようとする彼女の決心は日毎に強くなった。

神は故意に罪を犯そうとする人々の途上につまずきの石をおかれるものであるから、[36] ジェラールを滅ぼそうとする機会は彼と司教ゴードリとの間の敵意の勃発において突然に生じた。ジェラールは司教と彼の側近の者について適当でないことを言っていたので、司教は黙っていたがまんできずにそれに耐えていた。彼の直臣たちや当市のほとんどすべての有力貴族たちとジェラールの暗殺をはかって、特定の富裕な女性たちも加わった助力の誓いを彼らと相互に交わし終えると、司教ゴードリはその件を仲間の共謀者たちの手中にゆだねて、自分はローマのサン・ペテロ教会への旅に出発した。彼がそこへ行こうとした一番の狙いは、神がご存じのように、この使徒を追慕するためではなく、不在を理由にこのような犯罪での中立をよそおうとしたからである。聖マルティヌスの祝日[37]頃に旅だって、彼はローマに着くと、自分がにくんだ男の暗殺の遂行を知り及ぶまでしばらくの間そこに滞在した。何故なら、ジェラールが善良なすべての人々からほとんど憎まれていないということがわかればわかるほど、司教はその悪事にますます悩まされたからである。

その行為は次のようになされた。御公現の大祝日 Epiphany のある週の金曜日、[38] 朝の光りがまだほのかな頃に、ジェラールは司教座聖堂ノートル・ダムに出かけるためにベッドから起き上った。あの誓いに加担している貴族の一人

が彼のところにやってきたので、ジェラールはその男に昨夜みた夢のことを話した。彼が言うには、その夢で全く動転してしまったということであった。彼が鮮かに見た夢では、二匹の熊が彼のからだのどちらとははっきりと言えないが肝臓か肺臓のいずれかを引きさいていた。

悲しいかな、ジェラールは不幸にも次の理由で秘蹟にあずかっていなかった。バリジ・サン・タマン Barisis-Saint-Amand に住んでいる修道士の一人はドイツ語しか話せない二人の少年にフランス語を教えることを引受けていた。[39] ところで、バリジはそれに付属する荘園と共にジェラールの保護の下にあった。この少年たちが立派な振舞をしているのを見て、又彼らが賤しい生まれではないことを知って、彼は彼らを捕え、抑留して身代金を要求した。この少年たちの母親は同意した金額とともにアーミン毛皮製でマントと呼ばれる毛皮の外套を送ってよこした。

深紅の外衣にこのマントをきて、彼は配下の数人の騎士を連れてその教会へ馬にのって出かけた。教会に入って、彼は十字架にはりつけられた主の像の前に立ちどまり、随行者は聖者たちのさまざまな祭壇の方へあちらこちらと散らばると、共謀者たちの召使たちが彼らを見張っていた。同時に、キエルジーのジェラールが（彼はその城の領主であるのでそう呼ばれていたのであるが）[40] 祈りのために教会へやってきているという伝言が司教館にいる司教の家臣の許へ届けられた。外套のうちに剣をしのばせて、司教の兄弟ロリゴン Rorigon と他の者たちは地下の回廊を通って彼が礼拝しているところへと行った。彼は教会のほぼ中央にある説教壇から二、三本の円柱をへだてた標柱と呼ばれる円柱の下にひざまづいていた。朝もまだ暗く、この大教会に少しの人影しか見られなかったときに、彼らは礼拝中のこの男を背後から襲った。彼は外套の締着をうしろに投げ出し、両手の指を胸のところで組合わせて祈っていた。その外套を背後からつかんで、彼らの一人は袋のようにしてその中に彼を捕えたので彼はたやすく自分の両手を動かすことが出来なかった。司教の執事はこのようにして彼をつかまえると、「捕えたぞ！」と言った。いつものどう猛さで、ジェラールは片方の眼をその男にふりむけて、（何故なら彼は片眼であったから）、にらみつけて言った。「立ち去れ、このうす汚ない好色漢め！」しかし、この執事はロリゴンに「やっちまえ！」と言って、彼の左手で剣を抜いて彼はジェラールの鼻と眉毛の間を切りつけた。自分が殺さ

れるのを知って、ジェラールは言った。「貴様たちの望んでいるどこへでも俺をつれて行け。」それから彼らは何度も彼に傷をおわせてひどく痛めつけたので、彼は絶望してあらんかぎりの力をふりしぼって叫んだ。「聖母マリア様、お助け下さい！」こう言って、彼は最後の苦しみに落ち込んだ。

当教会の二人の副司教ゴーティエ Gautier とギー Guy は司教とのこの陰謀に加わっていた。ギーは又財務管理人であり、教会の片側に館を持っていた。この館から、間もなく二人の召使が飛び出してきて、彼に走り寄ってこの殺人に加わった。何故なら、神聖をけがす誓いによって、司教館の者がまず実行に移ったならば、すぐさまこの館から助人を出すことが決められていたからである。彼らが彼ののどや脚を切りつけ他にも傷を負わせて、彼が教会内陣で最後の苦痛にうめき声をあげていたとき、丁度聖歌隊のなかにいた少人数の聖職者とその周囲でお祈りをしていた幾人かの貧しい女性たちは、彼らの行為に不満の声をもらした。しかし、恐れのあまり半死の状態になって、彼らはあえてあからさまに大声を出そうとはしなかった。この殺人の犯行が終わると、二人の慎重に選ばれた騎士が司教の館にもどり、彼らとともに、又副司教たちとともに当市の貴族が集合した。このことによって彼らは自分自身の裏切りを暴露した。

その直後に、国王のプレヴォ prévôt であるイヴォ Ivo と呼ばれる非常に有能な男は、国王に直属する人々とジェラールがその守護であったサン・ジャン大修道院の市民たち burghers を召集した。[41] 彼らはこの陰謀に誓いをしていた者たちの屋敷を襲い、力づくで家財を取り、屋敷に火をつけて、彼らを当市から追放した。一方、副司教や貴族たちはいたるところでジェラールの暗殺者たちを伴って、不在の司教に対する彼らの忠誠をはっきりと示した。

〔注〕

(1) この修辞は古典的である。何故なら、悲劇はギベールの時代では上演されなかったからである。

(2) アダルベロンは九七七年から一〇三〇年あるいはそれ以後までランの司教であった。ユーグ・カペー Hugh Capet の利益を前進させるためのロレーヌのシャルル Charles of Lorraine に対する彼の裏切りは、一〇世紀の修道士リシェル Richer によって記録された。ラン教会に対する彼の奇特な行いをふくむ彼の生涯については以下を参照、Robert T. Coolidge, "Adalbero, Bishop of Laon," Studies in Medi-

eval and Renaissance History, II (1965), 1-114.

(3) ギベールはここではリシェルとシャバンヌのアデマール Adhémar of Chabannes とは異なる。彼らは枝の主日 Palm Sunday (九九一年三月二八日) の前夜に裏切り行為をおく。ギベールは彼自身の後の記述内容に合わせるためにここでは記録を改めたのかもしれない。

(4) エリナンはアダルベロンの次の後継者ではなく、一〇五二年から一〇九八年まで司教であった。

(5) マントのゴーティエ三世はエドワード懺悔王とヴェクサン伯 count of the Vexin ドリューの姉妹であるゴーダ Goda の息子である。ポントワーズのエリナンがイギリス宮廷に行ったのはこの関係によってである。多分、ギベールはゴーダと伯ゴドウィンの娘である王妃エディスを混同した。

(6) ランス大司教職が一〇六七年に空席になったとき、その財源は国王フィリップにもたらされた。エリナンの要求はランスのマナセス一世 Manasses I of Reims によって争われた。マナセスはローマの改革派に支持され、一〇七〇年に大司教に任じられた。教皇アレクサンデル二世 Alexander II の声明は司教は自己の司教管区で結婚し、又教皇の許可なしに転任させられ得ないことを主張する。John R. Williams, "Archbishop Manasses I of Rheims and Pope Gregory VII," American Historical Review, LIV (1949), 806-807 参照。

(7) 一〇八九年に、エリナンはノジャンの修道院に近辺の三教会の支配を許した。Gallia Christiana, IX, 525.

(8) クーシィのアンゲラン Enguerrand of Coucy は一〇九八年の遅くか、あるいは、一〇九九年の早くにラン司教となり、一一〇四年に死んだ。

(9) 一〇七一年に出されたフィリップの特許状は以下に印刷されている。Maurice Prou, Recueil des actes de Philippe Ier (Paris, 1908), pp. 160-163. ルイ六世は一一二一年にこれらの諸権利をラン司教職に回復させた。Achille Luchaire, Institutions monarchiques de la France (2nd ed., Paris, 1891), II, 335-336 参照。

(10) ボブスのアンゲランは司教アンゲランの一番目のいとこであった。双方とも Aubry of Coucy の孫であったから。彼は一〇八五年にアミアン伯、一〇八六年にクーシィの領主となった。最初の結婚によって彼はマルル Marle の領主となった。一一一六年没。ギベールが言うように、彼は地方教会に多大の寄進をし、一〇九五年にノジャンの特許状を確認させた。彼はマルルのトマ Thomas of Marle の母、Adèle of Roucy を不義の科で離婚させた。このために、ギベールはこの作品を通じてトマはアンゲランの息子だといわれる男であると述べる。

(11) この特殊な結婚がある教会会議で非難されたという他の証拠はない。ギベールは不義な結婚は一般にしばしば非難されてきたということを多分意味しているのであろう。

(12) イザヤ書　一四・二九

(13) ギベールの同時代人、Saint-Hubert-en-Ardennes の修道院史の著者はロジェの行動に対して全くちがった動機を与え

る。この説明によると、ロジェは彼の娘をナミュールのゴドフロワと結婚させたが、彼が投獄され伯位からしりぞけられてしまった後にはじめて一〇八七年に自己の伯領を売った。Monumenta Germaniae historica, Scriptores, VIII, 601 参照。cf. Gaston Robert, Documents relatifs au comté de Porcien (Monaco-Paris, 1935), p. vii.

(14) トールヌの城はアルデンヌ地方の Renwez 近くにある。

(15) ヨブ記 二〇・二七 少し改訳されている。

(16) 司教管区は一一〇四年から一一〇六年まで空席であった。一二一五年の第四回ラテラン宗教会議 the Fourth Lateran Council までは司教の選任は司教座聖堂参事会 cathedral chapter に限定されていなかった。ギベールは司教区の大修道院長の一人として出席した。クーシィのアンゲランのような名のある俗人の司教選挙での役割は一二世紀初期に大いに論争された。ラン司教区に在住していた聖ノルベール St. Norbert は彼らの参加を防止した。Robert L. Benson, The Bishop-Elect (Princeton, 1968), pp. 263-267 参照。

(17) 教皇パスカル二世 Paschal II に対する彼の約束に反して、国王フィリップは依然として Betrada of Montfort とくらしていた。

(18) ゴードリは一一〇二年にヘンリー一世の官房長になった。Ordericus Vitalis, Historia ecclesiastica, XI, 20, ed. August Le Prévost (Paris, 1838-55), IV, 230 によれば、彼はノルマンディ公ロベール Robert を一一〇六年九月二八日の Tinchebrai の戦いで捕虜にし、このためにヘンリーによってラン司教職をさずけられた。

(19) ヘンリーは一一〇六年七月から一一〇七年四月までノルマンディにいた。

(20) アンセルム師はランの司教座聖堂の参事会長であり尚書院長であった。そして一一一六年頃殺されたゴーティエに代って副司教となった。一一一七年没。著名な神学者で指導的な聖書の注釈者である彼は多分聖書の少くとも Glossa ordinaria の部分の編纂者でもあった。彼とその兄弟ラウール Raoul はランで有名な学校を主宰した。ギベールはこれについて全く言及しない。その生徒のなかには Guillaume de Champeaux と Gilbert de la Porrée がいた。アベラール Abelard は一一一三年かその少し後に、アンセルムとともに研究するためにランにやって来たが、すぐに彼と争うようになった。学界での彼の位置に関しては、Beryl Smalley, The Study of the Bible in the Middle Ages (2nd ed., Oxford, 1952), pp. 49-51 参照。

(21) アダルベロンは一〇八一年以前にランのサン・ヴァンサン大修道院長となり、一一二〇年に没。他の情報では、スイス生まれであった。リブモン、あるいは Saint-Nicolas-des-Prés の大修道院はランの北方約二〇マイルにあり、当時の院長は Mainard といった。

(22) 一一〇七年の早くに、教皇パスカルは叙任権問題をめぐってドイツのハインリヒ五世と紛糾をおこして、フランス国王と協定に達する試みのために旅立った。彼はクリスマスを Cluny で過ごしていたが、二月一二日にはボーヌ Beaune に

おり、一六日にディジョンDijonに着き、二四日にはラングルにいた。実際には、彼はローマを最近立ったのではなく、前年の秋を北イタリアで過ごしていた。

(23) 教会法は当該司教区外からの見知らぬ人物を司教として選ぶことに警告していた。Gratian, Decretum, D. 61, c. 12 参照。

(24) 彼は当時四〇を越えていたが、ギベールは彼の若さ iuventus に言及する。この語は"youth"の現代的な意味あいを持たない。聖アウグスティヌスは、四五才で自分自身を青年 iuvenis と称した。Joseph de Ghellinck, "Iuventus, gravitas, senectus," Studia medievalia in honorem Raymundi Josephi Martin (Bruges, 1949), p. 41 参照。

(25) ヨハネ福音書　一九・三五

(26) いくつかの教会法は宮廷人を聖職者としたり、候補者を宮廷から求めることに反対する。Ivo, Decretum, VI, 95 and 349 (Gratian, Decretum, D. 51, cc. 2-3) 参照。

(27) ウルバン二世 Urban II によって発せられたカノンは十分に資格のある副助祭は司教に選出されることを例外的に認めた。Ivo, Decretum, V, 72 (Gratian, Decretum, D. 60, c. 4) 参照。

(28) グレゴリウス派の改革者たちは、非合法的な出生を聖職につく障碍とみなした。Dictionnaire de droit canonique (Paris, 1924-65), II, 253-255 参照。

(29) Suetonius, Macrobius, Cassiodorus や Isidore によって使われた一般的な古典的引喩。

(30) サン・リュフはアヴィニョンの伝説上の最初の司教であり、当市の重要な大修道院に彼の名前を与えた。何故ゴードリが彼の聖別のためにはるか南方に出むいたのかについて我々はいかなる情報も持たない。しかし、ラングル近くか、あるいはラン司教管区にはいかなる教会もサン・リュフに奉納されてはいなかった。

(31) ルカ福音書　二・三五

(32) ヨハネ福音書　一九・二六　ラングルの司教座教会は、聖マメルトゥスに奉納されている。

(33) ギベールは王の権威と愛とは両立しがたいことについて、オヴィディウスの作品 (Metamorphoses, II, 846) のよく知られた言及でたわむれている。

(34) キエルジーのジェラール Gérard of Quierzy はランのベネディクト派のサン・ジャン女子修道院の俗人守護 avoué であった。彼は明確に第一回十字軍に従軍していた。

(35) クーシィのシビーユ Sybille of Coucy は大財産を持った伯夫人と呼ばれる。何故なら彼女の夫はアミアン伯であったから。彼女の子孫は、その銘句として公表したように、Lord of Coucy という唯一の称号にのみプライドを持つことになった。

「俺は国王ではない。プリンスでも公でも伯でもない。俺はクーシィの殿様だ。」

(36) エゼキエル書　三・二〇参照。

(37) 一一〇九年一一月一一日

(38) 一一一〇年一月七日

(39) Barisis-aux-Bois の修道院は、ノジャンの北方四マイルにあり、六六四年頃に聖アマン St. Amand によって建立され、フランドルのサン・タマン大修道院に属していた。キエルジーのジェラールは、パリジとランのサン・ジャン双方の守護であった。

(40) キエルジーは、ノジャンの西方一〇マイルのところにある。

(41) プレヴォはランにおける国王の役人であった。ラン市は国王都市でもあり司教都市でもあった。国王に直属する人々は、高貴な家臣か国王の隷属民かのどちらかであったかもしれないし、国王の隷属民といったけれども単なる隷属民といった方がよいかもしれない。サン・ジャンの市民たちは、彼らが教会に払う租税のみかえりにランで市民権をもった大修道院の隷属民として考えられるであろう。